



「中井、亜空間内での速度をポイント5cに設定して、レベル7まで増速しろ」
「了解。亜空間内速度をポイント5cに設定。ワープレベルを7へ」
「機関出力レベル48%で安定」
「増速を開始。6.1、6.2・・・6.7、6.8・・・レベル7」
「機関出力55%で安定。出力変動は測定限界未満です」
「センサーレンジに障害物はありません」
「重力変動は大きくなっていますが、コース偏差は許容値内です」

いまのところは順調だ。通常空間換算での速度はこれで光速の128倍まで上がっている。

「よし、このままレベル8まで上げるぞ。準備はいいか」
「了解。いつでもどうぞ」
「よし、増速しろ」
「ワープレベル8まで増速します。現在7.1、7.2・・・」
「機関出力56%から上昇中。変動は測定限界未満」
「コース正常」
「7.7、7.8、7.9、ワープレベル8です。現在のレベルを維持します」
「機関出力60%で安定しています」
「重力変動がかなり強くなっていますが、制御の余裕はまだ20%ほどあります」
「センサーレンジ内に危険レベルの障害物はありません」

これで、当初の目標速度に達した。通常空間からみれば光速の256倍で飛んでいることになる。船はすでにオールトの雲のど真ん中を太陽系の端に向かって進んでいる。恒星間宇宙船の速度としては決して速くはないが、この速度ならば、目的の座標までは1日もかからないだろう。

「大丈夫そうだな。だが、まだ気を抜くなよ。こいつがプロトタイプだということは忘れるな。何かあったらすぐに対処できるようにしておけ。エドワーズ、重力変動が許容値を超える限界距離はわかるか」

「今のワープ深度では、連星系の重心から10光時プラスマイナス7光分で変動が許容値を超えます」

「そうか、だとすれば、そこから先は速度を落とさないといけないな。よし、目標から12光時手前でワープレベルを4まで落とす。それから8光時手前で一旦ワープアウトして、影響を計測しよう」

「沢村、今の前提で所要時間を出してくれ」

「了解。計算します……。目標座標、速度を再設定、所要時間は・・・22時間43分です」

「そうか。それなら、また交代で一休みできるな。しばらく様子を見て大丈夫そうなら、シフトどおりに休憩を取ろう」

「それじゃ、ここからは俺たちが当番だな。ケイ以外の女子は休憩に入ってくれ。ジョージもな」

「僕は休養十分だし、しばらくは新しいコンピュータの作業を続けるよ」

「それじゃケンジ、たのんだわよ。ちゃんと仕事ないさいよね。誰かさんも！」

美月は、素晴らしいながら、ケイのほうをちらつと見てからコックピットを出て行った。残ったのは、俺とフランク先生、そしてケイの3人。

「やった、女子は私だけ。これで先生とケンジと3人で楽しい時間・・・っと」

「おいおい、まだ気を抜くなよ。これから、どんどん危険なエリアに近づいていくんだからな」

「わかってますって、先生。ちょっと試ってみただけです。航路上、検知可能な障害はありません」

「オートパイロットも問題なしです。重力変動に対しても十分余裕を持って対応できてますね」

「うむ、機関も問題なしだ。とりあえず、このまま順調にいったほしいものだな」

フランクは、そう言うど教官席に座って、腕組みをする。たしかに油断はできない。俺たちが向かっているのは、宇宙で最も凶悪な存在であるブラックホールなのだ。しかし、それから数時間、これといった問題も発生せず、結果として俺たちは、退屈な時間を過ごすことになるのである。



「順調そうだね」

俺たちがいい加減退屈しきっていたところにジョージがやってきた。本来ならば休憩時間なのだが、この数時間、倉庫にこもって新しいコンピュータのプログラミングをやっていたのである。

「先生、基本的なソフトウェアの組み込みは終わりました。単体でのテストは問題ありません。ユイも確認しています」

「そうか、思ったより早かったな。それじゃ、次は、ユイの一部として、そのユニットを組み込んでテストしなきゃいかんのだが、問題はなさそうか？」

「確認した限りでは問題はありません。念のため、新しいユニットはサンドボックスの環境で組み込みテストをします。万一動作がおかしくなっても、全体に悪影響を与えずにすみませぬのわ」

「よし。それじゃ、アカデミーにその事を連絡した上で、準備を始めよう。ユイはデイズに詳細情報を連絡して承認をもらってくれ。それから、組み込み準備だ。実際の組み込みは、準備が確認出来てからやろう。エイブラムスは、いまのうちにちよつと寝ておけ」

「了解しました。作業承認を要請します」

「それじゃ、僕はちよつと一休みさせてもらいますね」

ジョージはそう言うと、またコックピットを出て行った。

「沢村、航路上の状況はどうだ？」

「えっと、現在の深度で航路上に問題となるような障害はありません。通常空間側は、オールトの雲の最も濃い部分を通過中で、小惑星や彗星核の間隔がだいぶ狭くなっています。ワーアウトする際は注意が必要ですね」

「そうか。まあ、ここでワーアウトすることはないからいいだろうが、目的付近の状況も気になるな。ブラックホール周辺は何があるかわからんからな。引き続き、通常空間側の監視も続けてくれ」

「了解です」

「中井、操縦系統の制御に問題はないか？」

「はい、問題ありません。オートパイロットへの重力変動によるフィードバック値が徐々に大きくなっていますが、今のところ限界までにはまだ余裕があります」

「そうか。そっちも、引き続きモニターをたのむ」

「了解しました」

フランクは、こうして時々俺たちに質問を投げかける。これも、集中力を切らせないための

配慮なのだろう。何事もないのはいいことなのだが、しかし、退屈もまた辛い。適度に忙しいという状況が、なぜかこのチームにはないように思えるのは、気のせいだろうか。いったい誰のせいだ。まあ、言わずもがなではあるのだが。俺は、変わり映えのしない計器パネルを見ながら、そんなことを考えていた。それからまた、退屈な数時間が過ぎていくのである。



「先生、L2から通信が入ってます。アカデミーからです」
「よし、出してくれ」

フランクがそう言うやいなや、前方の空中に通信パネルが開いて、そこにダイブの顔が映し出された。

「そっちはどうだ、フランク」

「とりあえず、順調・・と言うべきなのかな。今のところ、予定通りに進んでいるよ」

「そうか、それはよかった。ところで、例の演算ユニットの準備が出来たようだが、できれば早めにテストをしておきたい。例のハッカー小僧のソフトウェアを信用しないわけじゃないが、問題があれば早めに潰しておきたいからな」

「わかった。実は既に一部のユニットをセンサーの能力向上に使ってるんだが、今のところ問題はないようだ。そろそろ休憩中の連中が戻ってくる。そうしたら、エイブラムスに本格的な組み込みテストをさせよう」

「たのむ。こっちの本隊は、ちよつと資材の調達に手間取っているが、なんとか予定通りには出発させるつもりだ。だが、そっちの報告でワープ深度をあまり深く取れないことがわかったので、到着は少し遅れるかもしれん。なので、到着までの間に出来るだけ多くのデータを集めて分析を進めたいんだ」

「了解だ。準備が出来たら連絡する」

「頼んだぞ」

ダイブがそう言うのと通信が切れた。

「先生、ジョージを起こしましょうか。あいつ、放っておくといつまでも寝てそうだし」

「そうだな。かわいそうだが、そうしよう。起こしてくれ」

「了解です」

ケイは、コミュニケーターを取り出すとジョージを呼び出す。呼び出しのアラーム音は最大だ。

「おい、そろそろ起きなよ。仕事だよ」

しばらくして、ジョージが眠たそうに目をこすりながら、コックピットに現れた。

「すまんなエイブラムス。例の演算ユニットの接続テストをしたい。準備してくれるか」

「わかりました。ちよつと時間をください。いくつか確認することがあるので。準備が出来たら連絡します」

ジョージは眠そうにそう言うと、またコックピットを出て行った。しばらくすると、マリナとサムがコックピットに戻ってきた。

「おはようございます。皆さん、体調は大丈夫ですか？具合が悪いところがあれば遠慮無く言ってください」

マリナはそう言うと言分の席に座る。サムも自席に座ると、なにやら操作を始めた。最後に現れたのが美月である。ちよつと寝癖がついた頭を気にしながら、副操縦士席に座る。

「よし、そのまま聞いてくれ。あと約10時間で、我々は目標座標から12光時手前まで到達する。そこから先は、重力変動の影響を避けるために速度を落として進むことになるが、それまでの間に、データ収集と処理のためのシステムを伝えるようにしたい。今、エイブラムスが演算ユニットの準備をしている。まず、それをユイのシステムに接続して動作を確認する。その後、データ収集に使用するセンサー衛星システムとのデータリンクを確認する。こちらのほうは、エドワーズの担当だ。まずは、センサーシステムの動作確認をたのむ」

「了解しました」

「ユイは演算ユニットの接続準備と、センサー衛星の軌道シミュレーションをたのむ。アカデミー側と調整して、最適な衛星の配置を決めて欲しい」

「了解しました。ユニット接続準備は既に整っています。衛星配置はセンターコンピュータのシミュレーション結果があるので、それと現在得られている情報を合わせて割り出します。所要時間は1時間5分11秒です」

「ユイのシミュレーション結果が出たら、星野は衛星の軌道パラメータを入力して、制御動作を確認してくれ」

「了解」

「中井、沢村の二人は、引き継ぎが終わったら休んでくれ。少し短いけど、9時間後にはコックピットに戻ってきてくれ。いいな」

「了解しました」

「了解です。さつて、ケンジ一緒に寝よっか」

「おい」

ケイが余計なことを言うので、隣の美月の寝癖が少し逆立ったような気がする。まだ少し寝ぼけているようだから騒ぎにはならなさそうだが、さつさと引き継ぎを終わらせてしまおう。

「美月、現在、操縦系統には異常は見られない。重力変動に対する適応制御も問題ない。変動は許容値の30%未満におさまっている」

「了解。確認したわ。操縦系統をこっちにまわしてくれる？」

「了解だ。操縦系統を副操縦士席に移行する」

「移行を確認。操縦系統を引き継ぐわ。あとは任せて、さつさと寝なさい。言っとくけど、その色ぼけと変なことするんじゃないわよ」

「あのなあ、いったい何をするってんだよ。まあいい。それじゃたのむぞ」

そんな感じで俺とケイの二人は船室に向かう。まあ、こんな状況では、ゆっくり休むというのにはほど遠いが、とりあえず寝ておかないと後が辛い。絡んでくるケイは、とりあえず無視して、さつさと寝ることにしよう。俺は、船室の狭いベッドに寝つ転がると、ホールド装置のスイッチを入れる。シートホールドと同じ原理の装置だが、体に無理がかからないレベルでベッドから転がり落ちるのを防いでくれる。やんわり抱きかかえられているような心地よさがある。俺は、すぐに眠りに落ちた。



どれくらい寝ただろうか。なにやら、甘酸っぱい夢を見ていた気がする。真っ暗な船室のベッドの上で、ライトをつけようと動かした手に、なにやら柔らかい物が当たった。なんだろう。俺は無意識にそれに触る。

「あつ、はあ・・・」

小さな喘ぎ声……。俺は驚いて目を開ける。目の前に誰かの顔がある。慌ててライトをつ

けると同じベッドにケイが寝ているじゃないか。そして、俺の手はケイの胸に……

「うわっ、ケ、ケイ。なんでお前、こんなところに……」

「うーん、あ、ケンジ、おはよー」

「おはよーじゃない。いつの間に……」

「あはは、ケンジがあんまり気持ちよさそうに寝てるからつい……。でも、ケンジ、意外と大胆だね。ちよっとドキドキしたよ」

「こ、これは事故だ。そもそも、ケイが横にいるなんて思いもしなかったし」

俺は慌ててベッドから下りようとしたのだが、ホールド装置のせいで押し戻されてバランスを崩し、体を支えようと手を置いた先に、またケイの胸があったりして……。

「ねえ、ケンジ。もう一度灯りを消す？」

「ちがう。こ、これも事故だ！」

俺はもう何がなんだか分からなくなって、とにかくホールド装置をオフにした。結果は言うまでもない。支えを失った俺の体は、勢いよくベッドから転がり落ちてしまった。

「いててて……。なんで、こんな目にあわなきゃいかんのだ」

「おーい、大丈夫？ いきなりスイッチ切っちゃ危ないよ」

「ほっといてくれ。だいたいお前が……」

俺がそう言いかけた時に、俺のコミュニケーターに呼び出しが入る。

「ケンジ、そろそろ起きなさい。時間よ」

美月の声だ。あいつにこの状況を見られたら、また一悶着……。いや、大騒ぎになるに決まっている。もろもろ無かったことにして、さっさとコックピットに行こう。

「ほら、冗談はそこまですて行くぞ」

「えー、ケイさん的には本気なんだけどなあ……。まあ、いっかあ。まだ先は長いし」

そんなことを呟いているケイをおいて、俺は船室を出てコックピットへ向かった。今は余計なことを考えている場合ではないのである。



実際、そのあと事態は一気に緊迫する。俺が機長席に座り、そのあとケイが眠そうな顔をしながらナビゲーター席に座った直後、いきなり、けたたましいアラーム音がコックピットに響いた。

「重力変動の影響が限界に近づきつつあります。これ以上大きくなると危険です」

美月が叫ぶ。

「よし、中井。ワープレベルを2段階落とすぞ。実速度は現状維持しろ」

「了解。亜空間内での実速度ポイント5cのまま、ワープレベルを8から6に落とします」

「沢村、現在の位置は？」

「現在目標座標まで18.5光時です」

「少し予想よりも影響が大きいな。今のレベルでの影響はどうだ」

「現在のワープ深度での変動は限界の80%です。このまま行くと限界に達するのは時間の問題かもしれません」

「そうか。それならレベル4まで落とそう。多少余裕が出るだろう」

「了解。ワープレベルを4まで落とします」

「変動はどうだ」

「限界値の50%を切りました」

「よし、このまま様子を見ながら、目標まで8光時の所まで行くぞ。沢村、所要時間は？」

「現在速度で38分です」

「星野は変動値をモニターしてくれ。80%を越えたら報告を」

「了解。変動値をモニターして80%で報告します」

なにやら忙しくなってきた。もはや寝ぼけている余裕はない。とりあえず俺も仕事に集中しよう。

「ユイ。センサー衛星の配置シミュレーションはどうなった？」

「シミュレーションは既に完了して、初期データは衛星にインプット済みです。新たに接続した演算ユニットも問題なく動作しています。現在、観測されている重力変動をもとに、補正を行っています。この作業は衛星投入の直前まで継続します」

「よし。エイブラムスは衛星の動作チェックをたのむ」

「了解です。衛星の動作チェックを開始します」

「エドワーズ、長距離センサーで目標座標の状況はつかめるか？」

「通常空間内の目標座標はまだセンサーレンジの外です。直下の亜空間内の重力波源から推測して、褐色矮星とブラックホールの距離は平均で200万Km以下。ただ、重力波の変化からみて、軌道は大きく歪んでいる可能性が高いと思われます。現時点での観測では公転時間は1時間13分プラスマイナス23分ですが、軌道の形状によっては、もっと長い可能性もあります。正確な測定にはもう少し時間が必要です」

「それは異常だな。一般にブラックホールみたいな大質量星と褐色矮星のような軽い星との近接連星系は真円に近い軌道になるはずなんだが。もしかしたら、もともとの連星系の一方がブラックホール化したのではなく、はぐれブラックホールが途中で褐色矮星を捕獲したのか」

「その仮説を支持します。実際、この軌道を長期間維持するのは難しいと考えられます。やがて、褐色矮星はブラックホールに飲み込まれてしまうでしょう」

「それがこんなところで起きたら大惨事だが……。とにかくもう少し情報を集めよう。引き続き観測を続けてくれ」

「了解しました」

「ユイ、今の話で衛星配置のシミュレーションにどれくらい影響が出る？」

「はい、軌道が真円でないとなれば、衛星軌道も大きく変わります。長距離センサーの情報をこちらにいただければ、精密な分析ができます」

「よし、たのむ。エドワーズ、データをユイに渡してくれ」

「了解。長距離センサーのデータをユイのインターフェイスに接続します」

「センサー接続を確認しました。分析を開始します。おおまかな結果は5分20秒で出せませす」

「先生、全衛星の動作チェック、完了しました。異常ありません。投入軌道が決まればいつでも放出できます」

「よし。ユイの分析結果が出たら、暫定軌道を設定しよう。あとは、ワープアウトしてから精密観測をして微調整だ」

「了解です」

「設定座標まで、あと30分」

「重量変動は許容値の55%」

それから、張り詰めた時間が流れていった。俺たちの船は、刻一刻と宇宙で最も凶悪な存在に近づいている。初めての長距離航行が、まさかこんなものになるうとは、ちよつと前まで想像だになかった。だが、このミッションに地球の命運が託されていると言っても過言ではない。いや、あまりそれは考えないでおこう。プレッシャーが大きくなるだけだから。

「先生、あと3分で8光時手前に到達します」

「よし。中井、8光時手前でワープアウトするぞ。エドワーズは、ワープアウト後、ただちに精密観測を始めてくれ」

「了解です。8光時手前でワープアウトを設定します」

「重力波及び光学センサーの準備完了。ワープアウト後に自動で起動します」

「よし、全員ワープアウトに備えろ。障害物に注意」

「通常空間、ワープアウト座標から1光分以内に障害物は検知していません」

いよいよ、俺たちの行く手に怪物が姿を現すことになる。だが、まだ距離は太陽と海王星の平均距離の2倍近く離れているから、まだ危険はないはずだ。むしろ、小惑星や彗星核のような障害物の方が危険なのである。

「ワープアウトまで10秒」

「ワープアウト座標周辺はクリア」

「3・・・2・・・1・・・ワープアウト！」

一瞬、軽い目眩のような感覚と共に、俺たちの船は星の海の中に飛び出した。

「重力波センサー起動。光学センサー画像をスクリーンに出します」

サムがそう言うのと同時に、前方のスクリーンに明るい星空が映し出される。ちょうど方向は銀河系の中心、天の川の中央部である。

「目標を特定。拡大します」

次の瞬間、スクリーンの映像がズームインして、星が画面の外へ一気に流れていき、真っ黒になった背景に、ぼんやりと何かが映し出された。

「あれがブラックホール？」

ケイが呟く。

「いや、アレは褐色矮星のほうだ。ブラックホールは、この明るさだとまだ見えないだろう。」

エドワーズ、センサーの感度を最大まで上げてみてくれ」

「了解。感度を最大にします」

次の瞬間、ぼんやりと見えていた褐色矮星が、明るい星になり、それから少し離れた場所に薄暗い円盤のような物が映し出された。

「もう少し倍率を上げられるか」

「了解。倍率を上げます」

また映像がズームして、円盤の姿が、大きく見えるようになった。

「あれが、ブラックホールの降着円盤だな。褐色矮星から吸い込んだガスが高速で回転して熱を帯びているんだ。ガスの量が多すぎないから、うっすらとしか見えないが」

「センサー衛星の投入軌道の補正が完了しました。いつでも衛星を射出可能です」

「よし、順次衛星を射出。スクリーンにチャートを出してくれ」

スクリーンに、周辺宙域の3Dチャートが表示される。その上に、各衛星の軌道が色分けして表示されている。

「1号から順次衛星を射出します。初期速度は目標座標相対で0.5c」

ジョージがそう言うと、チャートの端に射出された衛星が点で表示されていく。このスケールだと、光速の50%というスピードにもかかわらず、ほとんど静止して見える。チャートの端から端までは、およそ1光日あるから、単純に横切るだけで2日かかる計算である。

「各衛星の軌道投入は8時間から10時間後の予定です」

「よし。中井、我々の速度を目標座標相対で0.3cまで落とそう。我々は、この連星系の重心から半径4光時で直交する軌道に入るぞ」

「了解。目標座標相対で0.3cまで減速。ケイ、我々の軌道パラメータを計算してくれ」

「了解。フライトコンピュータに設定するか？」

「たのむ」

「オッケー。設定完了」

「軌道への自動進入を設定。我々の軌道進入完了は12時間後の予定」

「エドワーズ、衛星のセンサーのデータは受信できているか？」

「全衛星とも正常です。データはすべてユイにリンクしています」

「現在、L2との間で受信データのリンクをテスト中です。あと2分35秒でセンターコンピュータとのリンクを確立できます。その時点から、当面得られるデータを使って処理を開始する予定です」

ユイは淡々と仕事をこなしていく。俺は、たぶん他のメンバーも同じだろうが、だんだんプレッシャーが大きくなってきているのを感じている。AIにとって、こんなプレッシャーは無縁なのだろうか。

「私もプレッシャーは感じますよ。でも、それによって他の仕事に影響を受けたりしないだけです。方針さえ決まれば、大半の処理は通常の計算ロジックがやってくれますから。皆さんも、おおまかな方向を決めたら教えてください。そこから先は私の仕事です」

俺の心を読んだかのようにユイが言う。いや、言ったというよりは、その言葉が俺の心の中に浮かんだような感じだ。少し前から、俺とユイ、それに美月もだが、互いに言葉を介さずに思考をやりとりできるようになっている。これは、例の抽象思考インターフェイスの効果なのだろう。心の中を覗かれているようで、ちよつと不安もあるが、この状況下では言葉を介さずに意思疎通が出来るのは悪くない。たぶん、美月も同じ事を思っているはずだ。それも、暗に伝わってくるのである。

「よし、少し休憩だ。中井と沢村以外のメンバーはひと休みしろ。6時間ほど休んだら、また交代だ。あまり時間が無いが、軌道進入の1時間前くらいからは臨戦態勢だ。いまのうちに体を休めておけ」

「了解。ケンジあとは頼むわよ」

「それでは、お願いします」

美月、マリナ、サム、そしてジョージの4人がコックピットを離れる。残ったのは俺とケイ、そしてフランクの3人である。

「先生は休まなくて大丈夫ですか？」

「ああ、私も君らが休んでいる間に、少し休ませてもらったからな。今のところは大丈夫だ。後でまた少し休ませてもらうよ」

「無理しないでくださいね。もう若くないんですからあ」

「おい、そりやどういう意味だ。まだ、そこまで言われる歳じゃないが」

ケイの一言に、ちよつと不満げな表情を見せたフランクである。さておき、またしばらくは、
退屈だが気が抜けない時間が過ぎてゆくのである。